

早稲田ヨットクラブ

会報

第10号

昭和56年9月 発行
発行者 舟岡 正
事務局 長 舟岡 正
会費振込先 日本橋支店
第一勧業銀行
普通預金 一四四五七三九
口座番号 一四四五七三九
ワセタヨットクラブ 杉山博保

残念!!第43回『早慶戦』中止?

今年六月例年通り開催される予定であった第43回早慶戦は早稲田専門学校生部の出場問題につき双方の話し合いが付かず残念乍ら今日に至って居ります。我早稲田としては出来るなら秋にでも

早慶戦を実施したい方向で、理事会では杉山理事長、舟岡事務局長、加藤監督の三名を全権代表として専任し、慶応側との折衝を続け事態の收拾を計っている。

早慶戦中止のいきさつ

今年で四十三回目を迎える筈だった早慶ヨット定期戦は、早稲田専門学校生部の出場をめぐり、慶応側よりクレームが出た中止となった。

昨年この問題が慶応より提起され、両校のOB代表が話し合い六月の本レースは開催されたが、秋の新人戦は慶応側の申し入れにより中止されたいきさつから、本年の実施が危ぶまれていた。

今年も慶応側の申し入れで四月二十二日OB代表の話し合いがされ、慶応側は専門学校生抜きの開催を主張し、早稲田は昨年と同様の主張で慶応の申し出を拒否し、従来通りの定期戦開催が慶応側に受け入れられないならばオール早慶戦という名目でもレースを継続することを申し出て慶応側に検討を依頼、後日回答をもら

うことで会談を終った。

その後慶応側からの回答が無い為、早稲田側より催促した所、オール早慶戦については慶応側は気乗り薄であり、中止とせざるを得ない旨合意が出来たが、その後三田ヨットの平松会長より早稲田堀江OBに超OBの話し合いの申し入れがあったり、慶応ヨット部、山崎部長より矢頭先生に電話による打診があった。

堀江OBは本件についての早稲田側の交渉窓口はクラブの杉山理事長以下現執行部がその任に当る旨返答し、矢頭先生は早稲田体育局の専門学校生の正式部員認知の背景を説明して、慶応の申し入れを丁重に断り、これで慶応側が翻意しなければ中止もやむを得ないということになった。今年の定期戦は不成立ということになった。慶応側の主張は、早慶ヨット定期戦は大学対抗レースであり、早稲田大学専門学校生は大学生でないから出場資格が無

いという主張であり、早稲田側の主張は早慶ヨット定期戦には過去何回も高等学院生や慶応高校生が出場しており、厳格な意味での大学対抗レースではなかった筈で、早稲田大学体育局が正式に部員として認めている学生を締め出そうというのは内政干渉だということ。しかし早稲田は自校の主張が相手校に容れられないならば、現在在部している専門学校生以外は今後入部させないから、今在部している学生が卒業する迄(昭和五十七年度)現状で我慢して欲しいとも述べている。

両校OBの話し合いには、早稲田は、昨年に引き続き当り、慶応は昨年は磯村有馬、森が、今年には石井、磯村、鈴木、森の四名が出席し、その後の折衝は舟岡、磯村を窓口として行われていた。早稲田側は小沢会長をはじめ、理事会のバックアップもあって、窓口担当者としては早稲田の一枚岩を強く感じていたが、慶応側は若干複雑な動きがある様で、中止が確定してから不戦勝にしたいとか、六月十八日付の山崎部長名による矢頭部長への抗議文(後述)が出されたり、情報源は不明だが六月二十七日付東京新聞の夕刊に写真入りで「伝統の早慶ヨット定期戦部員問題でお流れ」という記事が出たりしている。

早稲田としても早慶ヨットレースは大なる行事であるという認識は十分持っており、現状を好転させる努力を惜しまず、慶応OBと善後策を協議する予定である。今の所熱い局面であるが、両校にとつて早慶ヨットレース再開は当然の願いであ

り、必ず解決出来る筈のものであるから、今しばらく推移を静観して下さる様切望する。(舟岡)

慶応側より送附された書面

早稲田大学体育局ヨット部
部長 矢頭敏也殿
慶応義塾体育会ヨット部
部長 山崎 努

「前略時下ますますご清栄のことと存じます。すでにご存知のように、本年度の早慶ヨット定期戦は両校ヨット部関係者の協議により、六月六日、七日の両日に三戸浜で挙行されることが決定されておりましたのに、貴ヨット部内の事情のために、全く一方的に実施できなくなりましたことは、大変残念に思います。本年はわが校が当番校でありましたので、レースの前日まで、その実施のために万全の準備をいたし、六日の朝も部長、監督および三名の先輩が合宿所で待機いたしておりました。それにも抱らず、貴ヨット部は練習のために三戸浜の海面に出艇しても、早慶戦の実施には、その意志を全く示さなかったことは、相手校に對して非礼極りなく甚だ遺憾に思います。

そもそも、専門学校は学校設置の上で大学学部とは全く異質のものであり、その生徒を大学生と同等の資格で、レースに出場させること自体が理不尽のことである上に、過去一年以上にもわたって貴ヨット部が頑迷にもその主張を始終変えることなく専門学校生徒の出場に固執し

全日本学生選手権大会

観戦記(於福岡・小戸)
監督 加藤文生 記



本大会前々日に開催された学生個選において、S級で小池・石渡組が優勝。四七〇級では浦田・長瀬組が第三位、黒田・芝崎組第六位と健闘し早稲田の闘志はいやが上にも盛り上げる。

一方OB諸氏もこのニュースを知って小沢会長始め、東京から松本・安藤・舟岡・町田・橋本・大原の各氏。関西から川瀬・貝出・市村・博多在任の長医・吉田・冬至夫妻・尾本・矢野・冬至・広島・井上・川崎の各氏が期待に胸ふくらませ応援に駆けつけて下さった。

試合前のOB・現役が一体となった熱気は他校を圧倒し、コーチで招いた小松

氏の指示にも一段と熱がこもる。

第一レース開始。早稲田の苦手とする微風の中、選手達に苦意思識が無ければと心配になる……。恐れていたことが現実になってしまった。

第二レース、若手でメンバーを組んだ四七〇級は全艇(三艇)タイムリミット(二時間)の失格。S級もこれに連鎖反応を起してか二艇がタイムリミット、小池・森田組だけが六位、一位の大健闘。

二日目も全くの微風。風は三六〇度のシフト。海面は油を流したようで、何処からともなく風が吹いたり止んだりで冬至氏所有のクルーザーに乗ったOB・現役の応援団も暑さに参る。

S組だけが初日の惨敗を取り戻さんとハッスル。この回戦だけでは三位の成績で終る。第四レースは最終日に延期となる。

何とか風が吹いてくれないかと現役と共に祈るが、全日本の開催時期が8月初旬の中旬のため気候的に云っても無理な

最終日、起床と共に空を早上げる。どんよりした曇空から突然の大雨。風はある。千載一遇のチャンス、強風の早稲田にとつて願ってもない大逆転の機。

しかし艇の計測問題でスタートは一時間の延期となり、海面からだんだん風が無くなっていくのが解る。残念だが今日も亦微風の中のレースだ。だが部員は最終日のレースに賭け、気合も入っている。最後の力をふり絞ってやろうじゃないか……と。

S級、早稲田魂を発揮し、四、六、七位のフィニッシュ。各回戦の中でも最高の成績で、この回戦だけは他校を圧倒。

レース終了後、冬至氏の庭に部員一同招待されてのガーデンパーティ。九州在任のOBの暖かいもてなしを受け、感謝・感激。その上、冬至氏のご両親より金一封まで頂き部員にとつて早稲田ヨットの素晴らしさを身をもって感じたことと想います。

OB各位の熱の入ったご支援にも何わらず、S級四位、総合第五位と云う結果に終った全日本のレースを反省し、この微風の経験を生かし、来年の琵琶湖では、「都の西北」を皆様方と 緒に謳歌したいと思ひます。

末文になりましたがOB諸氏、九州在任のOB、そしてそのご家族の皆様のご好意に部員共々お礼申し上げます。注、参加校二十三校、S級、四七〇級 各三艇出場

◎名簿訂正のお願い

P 7、小沢忠次郎 勤務先住所訂正

⑭中央区日本橋二丁目一六

P 16 漆原秀雄 自宅転居

⑮杉並区天沼二丁目一十五

電話(三九)一二六二

P 39 松島政弘 ⑯松下政弘

◎左記の方々の住所お知らせ下さい

- ⑮永田恒 ⑰中道尚志、大森一樹、小松忠雄、荻野光世 ⑱町田格 ⑳三田要之助 ㉑氏川豊太郎、阿山剛男 ㉒湯城登四郎 ㉓吉川悟 ㉔赤石聡明 ㉕明城敏 ㉖小山次郎 ㉗村瀬哲夫 ㉘堀和夫 ㉙和田長雄 ㉚井上慎一

(前頁下段より続く)

できたことは、われわれの理解の限度を越えるものであります。

この間、本来ならば先ず貴部内において良識に基づき、自主的に解決すべき問題を、当方としてもあくまでも早慶ヨット定期戦の伝統の灯を消すことのないことを願って、誠意をもって、円満に解決いたすべく貴ヨット部先輩諸氏と幾回となく談合を続けてまいりましたことは、貴殿もよくご承知のことであると思ひます。

しかしながら、貴部内の都合を当方に押しつけ当事者校に多大の迷惑をかけたばかりか、本年度の早慶ヨット定期戦を一方的にないがしろにした早稲田大学ヨット部の、その礼節を欠いた行為は、過去数十年にわたって両校の幾多の先輩たちが築いてこられた早慶戦の伝統を冒瀆するものであり、その責任の重大さをどのように受けとめておられるのでしょうか。われわれとしては、明年度以降の早慶ヨット定期戦がどのような結果をまもしようとも、それはすべて貴ヨット部関係者の責任であると言わざるを得ません。なを、本年度の早慶ヨット定期戦は、両校ヨット部の合議納得の上での中止ではないのですから、われわれとしては当然のことながらレースは成立いたしましたのみならず付記いたします。

(本文傍点は編集記入)

敬具

56年度会費納入者一覽

⑩小沢⑬松山⑭新名、増井、対島⑮長
 医、植松、宮川、永元、田原⑯堀、堀江
 、石川⑰隈部⑱金子⑳木村、横出、久保
 田㉑大伏、加藤㉒湯沢㉓添原㉔木本㉕河
 村、佐伯、大塚㉖金沢、石川、米田晴、
 安藤、円谷㉗岩本、松本、鈴木、浅山、
 遊佐、是枝、千葉、浜田㉘杉山、舟岡、
 安井、日色、伊藤、菅田㉙渡辺、山崎、
 塚崎、天神、中田㉚清水、加藤㉛岡村㉜
 大野、山田㉝土肥、吉田、吉川、原㉞石
 田、角田、伊藤、小沢、原田㉟木村、安
 藤、中島㊱杉山、山中、松島、斎藤、大
 生田 ④清水、小坂、頼、長沢、江上、
 斎藤、小浜、森、石井⑤金刺⑥大矢木⑦
 原田、武藤⑧町田⑨杉井⑩林⑪藤井、近
 岡⑫斉田、光武、渡辺、⑬市村、坂爪、
 白石⑭中島、地曳(合計一〇二万円)

ご寄附をいただいた方々

⑧小沢⑫森繁⑬新名、山田⑮水元⑯堀
 江、平野⑰隈部⑱能勢⑲坪田⑳清水、久
 保田㉑漆原㉒佐伯、大塚㉓金沢、石川、
 米田晴、安藤、円谷㉔岩本、松本、遊佐
 千葉⑩杉山、舟岡、安井、日色、伊藤、
 中田⑬加藤⑭土肥⑮伊藤秀⑯小村⑰杉
 山、山中、松島、斎藤、大⑱長沢、後藤
 斉藤⑲石合、千津井⑳北島㉑原田、菊
 地、⑳町田㉙白石(合計六一・六万円)

OB名簿作成ご協力(広告)者

⑩中沢、浜田⑫山崎、武村⑬清水⑭山
 品⑮原田⑯木村、土居、倉谷⑰班目⑱若
 松⑲後藤(以上十三名様) 敬称略

ヨット屋のおじさん

IN HAWAII

仕事で海外へ行く、公費とは言え、
 高い航空運賃をかけて行く遠い国でのこ
 とゆえ、一度に仕事を片づけようとの真
 乏根性で働き廻る為、却って日本にいる
 より忙がしい毎日が過ぎ、親光もパカ
 スもあつたものではない。

そんなある時、アメリカ出張からの帰
 途、「忙中閑あり」を無理無理創ろうと
 ハワイに立ち寄つく、本当に何十年に一
 度しか得られないであろう、たつた一人
 のパカンスを過したが、平均的日本人
 の悲しさでいざとなると、どうにもひま
 の過ごしかたがうまく行かない。

ワイキキビーチは、ファミリーだのカッ
 プルだのが、明るい陽差しのもとレジャ
 ーをエンジョイしている。ひとりいさ
 がってページョ色の砂に寝そべり、いい
 年をして、貝殻を数えてみても、まさか
 ビキニ姿の女性が奇つてくる訳はなく、
 何とも面白くなく間がもてない。

ふとみると、向こうに貸ヨット屋があ
 った。カタマランが舳いである。くやし
 いけど、生まれてはじめて、お金を払つ
 てヨットにでも乗ろうかと、そのヨット
 屋へ行き、「ヨット貸してくれや」と言
 った。赤茶色に陽焼したアメリカ人のお
 じさんは、サンングフスの奥から、しば
 ら私をみつめていたが、

「自分で出来るのかい？」
 「出来るさ」
 「でも、カタマランはむづかしいぞ」
 「大丈夫だよ」

「沈するよ、危険だよ」
 「いったい、貸すのか、貸さないのか
 どっちだよ？」

それから、おじさんは、十五分位もか
 けて、ステアリングの仕方だの、バウが
 波につつこんだらシートをゆるめるだの
 注意事項を並べた。こちらは慣れな
 い英語で、気がめいつてきた頃、
 「十ドルだよ。」

やつとの思いで、ひとりになり、沖へ
 向かったがベタだったのだ。ヨット屋の
 心配も、御無用だった訳である。
 然し、あの時はうんざりと思つて聞い
 ていた注意も、その後数年を経て、海上
 氣象の急激な変化に対する無防備によつ
 て、相も変わらず繰り返し起る海難事故の
 発生を聞くにつけ、自然の厳しさと基本
 の大切さを、改めて感じる今日この頃で
 ある。

OB諸兄も、たまに数年に一度でも、
 合宿所に顔を出し、うるさいな、と言わ
 れ竿らも、より永く生きていく経験から、
 人生の基本を現役学生に伝え、教えよう
 ではありませんか。(昭40)大 興太郎

四七〇級世界選手権壮行会

去る八月十日、四七〇級世界選手権に出
 場の小松・戸枝両君の壮行会が永楽クラ
 ブにて行なわれました。

全日本インカレ応援から急ぎ帰京した
 小松コーチは席上、ヨットクラブに感謝
 の意を表し併せて今後の抱負を20分間に
 わたり熱意をもって語つた。尚ヨットク
 ラブより両君に銭別としてそれぞれ三万
 円を贈呈いたしました。

△早風会△の斎藤一也様から、前回会
 報の稲竜・西宮廻航記を読まれ、お葉書
 をいただけて居ります。

「……………」稲竜・西宮廻航記の件
 私には殊の外印象となりました。
 そしてお話の一瞬々々が全く息詰ま
 る想いでした。実は私は大正六年三
 月、広島高師の卒業と同時に兵庫県
 立洲本中学に赴任しました者であり
 ます。そのため兄が結句とされまし
 た、(洲本の方向には足を向けては
 ……………)のご感懐に殊の他強く打た
 れております。

第十一回四大学OB戦

今年の四大学OB戦は十月三、四日の
 両日、琵琶湖にて同志社大学OB主催で
 行われます。早稲田側の委員は米田(晴)
 TEL〇六(二五二)四五二一、(榎丸
 奮)でご参加下さい。申込は9/29までに
 日時・費用

第一日 前後祭は同志社・唐崎艇庫前
 の庭にて18時〜21時バーベキュー
 第二日 10時 開会式が11時 第一レ
 ース、13時 第二レース、15・30
 閉会式

使用艇 OPデインギ②、レーザ
 ①、スナイプ①、
 費用は六、〇〇〇円(パーテイ、朝食
 昼食、宿泊含)家族は三、〇〇〇円

◎56年度会費とご寄附のお願い
 早稲田ヨット部への援助と、私たちの
 クラブ運営の為、本年も年会費一万円
 と何分のご寄附をお寄せいただきたく
 お願いいたします。

稲竜で、人文地理の旅

〔三木浦へ〕昭和55年8月3日(日)

紀伊半島東岩、尾鷲などという所は、相当の決心がなくては行けるところではない。昔と違って、昭和30年代はまだこと辺りは国鉄も通過しておらず、尾鷲・木本(現熊野市)間はバスであった。紀勢東線と紀勢西線が通じて紀勢本線になったという事も、今の学生達は全く知らない。

稲竜が下田から一路遠州灘を越えて、志摩半島南端をかわしている頃、私は大阪難波からの近鉄特急で津へ。次に紀勢本線急行で松坂の肉介当などやり午ら尾鷲へ。そこで鈍行列車を待ち合わせる事、時間。三木里についてはもう夕方五時に近かった。

台風10号の接近もさる事ながら冷夏真只中。駅前の茶屋で、淡茶とスルメで時を過すこと半時間。バスにて三木浦に至る。

岩壁に舫られた雨にぬれる稲竜を見つけた時のはずむ気持。雨までなつかしい感じだ。この辺りは日本で最も雨の多い所だが、そんな事に関係ない今年の列島は雨ばかりだ。その雨の中をサアン(喫茶店)に出かけてゆく若い学生達。岩壁で釣を試みる橋本OB(53)。私は先ず航海日誌を広げる。長谷山キャブテンは、後輩の訓練不足を嘆き、訓練不足で乗り出してきた反省を綴っていた。「無事に来てくれて良かったなあ」というのが第一印象。

雨は一晚中降りつづける。学生の作った天気図で台風の動きを推理し、明日への心構えを徐々に固めてゆく。私にとって、この気分がクルージングの醍醐味の一つである。

〔出帆・串本へ〕8月4日(月)

漁港の朝は冷夏でも活気がある。漁師の親方に吾々の予定を話し、避難港、波風潮の情報をきき。一方、長谷山君に尾鷲測候所に相談電話をささぎ。「おい、ヨットで串本に行くのだという事を言ってから情報をとれよ。アイスクリーム屋への返事とヨット乗りへの返事は違うんだぞとオールド、

ボーイは余計な注意をする。

これらの情報をまとめ、全員の意見を出させる。そして「出よう」。出港時刻を七・三〇とする。三木浦の港は正に天然の良港で、寄港地の選択はベストだった事を機帆走しつと思う。港外に出ると風も波も強い。

右に鬼ヶ城の奇岩を遠くに眺め熊野灘を南下する。この日の行程は串本への43マイル。

この辺りから米田教授の人文地理講義が始まる。沿岸解説。さぞ、うるさかったであろう。新宮の市内にある浮島がメタンガスで浮いている話。辯八丁の絶景とアロペラ船のこと。NHK朝のドラマにも出た太地の鯨とりの話。那智の滝の事や、蓬萊山をこに見つけて死んだ徐福のこと。紀伊の勝浦と房州勝浦の関連など、など。

やがて黒潮が現われる。この色の違いはどうであろう。全く異った明暗の青が並んでいる潮の不思議に若い学生は息をのむ。川上君の命声が実感に伴う。その間も空は暗雲が不気味に走り不安定な状況が続く。ここを過ぎれば次の避難港は？との問いに答え、南下してゆく。

大島の大きさに感じ入り乍ら、串本への進路をとる。橋杭岩の絶景を右に見る。これは海からの景色の方が良いと知る。

串本の泊地に一隻のクルーザーあり。これはサントピアからの寅丸であった。艇長は谷川氏、NORC内海支部のドンである。中沢OBからの伝言をきく。寅丸は鳥羽行きをあきらめ、明日は戻るとの事であった。高松の後藤OB(44)のうわさなどがある。保安庁から点検に来た。フェリーで大島に形だけ上陸して直ぐ戻る。風呂代白七〇円。旨い刺身を食った後、パチンコ。小生何故か良くはいつて杉井君をひがませた。町の魚屋で買った鯨刺身旨し。やはり太地からのものどか。

〔紀伊由良へ北上〕8月5日(火)

橋本OBは、小生の学生時代28年の生れの由。また学生さん達の両親は小生と同年輩という事であり、発言に注意しなければと思われされる。しかしクルーザー乗りの心は、クルーザー乗りのみが知る。その間に年令のへだたりは感じない。この連中と、また一生のつきあいが始まるなあとと思うと楽しい。

朝の串本港は、静かだった。台風はそろそろ

る東へ転ずる気配。いずれにせよ早く出るに如くはなし。小さな青空の下を出帆。寅丸は今日はずさみ」に入るとの事だった。

その名も不気味、通夜島をかわずともう、うねりが大きい。沖を行くタンカーが見えたり見えなくなったり。本州最南端、潮岬をかわず頃、飛び魚が稲竜の横を良くとぶ。グライダーの様に美しい飛行を見せる。一旦下がりがかかって再びぐうんと上昇する力強さ。

紀伊半島北上。チャートと地図をにらみ白浜までの長丁場をゆく。スピも小さな青空に良く似合う。青空は今日はいつも稲竜の上だけにあった。最近の分県地図は精密で沿岸クルージングに絶体欠かせないものだ。建物の記載も沿岸観測に大変役立つ。田の崎、双島、横島、江須崎、沖の黒島、和深崎、すさみ町、鯉島、安宅崎、日置大浜、市江崎、椿温泉……と地図と風景の照合の内

に北進。島や岬の名前と形状が、良く合っていて興味深い。やがて白浜。三段壁、千疊敷温泉街が良く見える。また人文地理講義が、白良の浜も公害で悩んでいる話。温泉旅館のビルも客の入りで半分以上死んでいるという話。

南部をこえると次の御坊までの間、風が北になり、のぼり帆走となる。煙樹ヶ浜を右に見て、元アメリカ村「三尾村」を発見する。今や日本中がアメリカ村になったしまつてこの移民帰りの漁村も名物でなくなつた。赤や青の屋根の洋館とアスファルト道路のある漁村で観光ルートになっているのは一九六〇年代までであろうか。豪快な口の岬を越えたと内海である。うねりは小さくなるが依然海は美しい。色はいつか淡青になつている。

枯れ木の岬を見ている内に由良である。岩壁に釣り人が連なっている。

「何が釣れますか」
「チヌ釣らんならん思つちやるんやけど」
釣れていない。この銭湯は何故か串本より安く百三〇円。稲竜レストランで山海の珍味。途中であげたシイラの煮つけも割にいた。今回も良い食当番を得たり。柴崎君、黒田君が汗でドロドロになり乍ら料理する。

航海中、杉井OB(48)が学生達に細かく適切に指導してくれた。私が気がつく事はほぼ同様に気付いて指導してくれて嬉しかった。

「ヨットはなあ、予測だぞ」
り返す彼。

同感である。

〔由良より、サントピアへ〕8月6日(水)

紀伊由良の沖の名もふさわしい白い「磯島」を大きくかわし北上再開。機帆走。初島下津の沖にはタンカー多し。東亜燃料と丸善石油の備蓄船であるうか。

この辺りで次々に艇尾にぶら下がる者多し。大と小を別々にやる術さえ心得れば最も快適な排泄場所である。「帰りはここで釣りやつたら良いなあ、コマセ利かてあるからなあ」と橋本君。雑賀崎と和歌浦が右に遠く霞んでいるのを残念がり乍ら一路友ヶ島水道へ。こ、で強い南流に合う。本船の往來に注意しつつ、徐々に接近するサントピアとの交信が出来る。目標を指示され、ほつとする気分と、一寸緊張する気持が入り混じる。

やがてサントピアマリナを望む時、パイロットボートの出迎えをうける。この人同志社のOB。セーラーを落し機走であとを追いつた。中沢先輩30が待ち兼ねた気持を全身に見せ乍ら機橋に。

「稲竜も昔は大きいと思つたが、ここに来るとどうでもないな」ですと。
「ナニ、中沢さんよ。お互いトシとつたつてことよ」

サントピアレストランで、旨い生ビールをいただいている時、寅丸船長入つて来られた。中沢さんの案内でサントピアの全部を案内していただく。色々お世話になりました。こ、で米田・杉井上陸し、フェリーで大阪へ。他の面々は西宮インカレまでこ、に滞在する。

〔へあとがき〕
伝統を継承する事は難しい。衰えさせてしまうことは簡単である。何事かの布石と底辺の広がりか幹を太らせ、結実させる。或る時大輪の花を咲かす。学生ヨットの現場であくなき努力の積み重ね。ヨットの由になつてゆく過程。そして指導する諸先輩の熱意。あとに控える歴代のOB諸氏の物心両面での支持応援。これらが良く循環して更に良い成果と想い出を生み、良いヨットマンを育ててゆく。

一九八〇年の夏を終つて今、私はこんなことを考えている。
完